

## ある卵巣腫瘍患者の死

新潟の5月といえば、水田は一面緑の絨毯（じゅうたん）と化し、畑のあちこちには色鮮やかなチューリップが咲き乱れ、いちばん過ごしやすい時期である。

連休が明けたある日、大学の臨床実習の講師として学生たちとグループ・ミーティングをしていた時のことである。突然、電話が鳴り「すぐ病院へ帰ってください！」という緊迫したメッセージを受け取った。治療点滴中だとばかり思っていた患者さんが、突然自殺したという知らせに「しまった！」と思わず絶句し、目の前が真っ暗になった。

その患者さんは36歳の主婦で2年前に手術をしたが、かなり進行していた。そのため、今回は3回目の再発入院だったが[がん告知]はしていなかった。彼女には、腹膜炎で腹水が少したまったので、炎症を治すための治療が必要だと説明した。内容を見られないように、注意してカルテを閉じたつもりだったが、その直後に

「やっぱり私は●●がんだったんですね！」と泣き崩れてしまった。

原因はすぐに分かった。修正液で消された白い所に書かれた[卵巣癌]という保健病名を見てしまったのである。

「●●がんではないんですよ」という言い訳は通用しなかった。しばらく無言の時間が過ぎた。やっと気を取り直し、入院の承諾をして、治療前の検査も無事終わった。5月の連休には外泊し、子どもたちと楽しい日を過ごし、喜んで帰って来た。それを見て内心ホッとし、大学に出かける前に、治療点滴をしてきたのに。

治療点滴というものは、退院している患者さんにとって、死んでも二度としたくないというくらい辛いものである。そんな苦しい治療にも耐え、治療後始まる脱毛の悩みにも負けずに頑張ってきた患者さんなのに、それがなぜ。

繰り返す入退院、苦しい治療、そんな苦しみにもう耐えられなかったのだろうか。治らない自分の病気のために、夫や子どもたちが犠牲になっていると考えての最後の選択だったのだろうか。

医師として、患者さんには病状を正しく説明し、自らの病気と闘うべきだと考えているが、[がん告知]に関しては、すべての患者さんに伝えることは私はしていない。卵巣癌の場合は、特にそうである。“癌”という一文字が、その人の生き方をまったく変えてしまう。

夫や子どもさんに母親の死を告げた時、何とも言いようのない厳しさを覚えた。しかし、いまだに私にとって[がん告知]の問題の解決はできていない。もうあれから4回目の5月が過ぎたというのの一。